

---

kiseki

ゆきうさぎ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

kiseki

### 【Zマーク】

Z2764D

### 【作者名】

ゆきりつせわ

### 【あらすじ】

もしかして、奇跡ってホントにあるのかも。誰にでも起つてみるのかもしれない奇跡。

## 40歳・小5の娘のママ・シングル歴10年。

これが簡単な私の自己紹介。

世間一般に言うところのおばさん」なのかも知れない。  
でも、こんな私にも10代、20代の頃のよう、いや今までに感じた事のない

キモチとして、奇跡が起った2007年の夏。

その人と出会ったのは、一昨年の秋。

初めて会った瞬間に今までの人生で感じた事のない「なにか」を感じた。

よく“頭の中で鐘が鳴った”とか“電気が走るような”とか聞くけど  
そのどれとも違う。  
なぜかわからないけど「この人だ」と思つた。

実は私はバツイチならぬ、バツ2。

2回も結婚していてなんだが、こんな感覚は人生初・だった。  
言い訳じゃないけど、1回目は本当に好きで結婚したけど、2回目は事情があり仕方なくだったから。

1回目の相手はとっても優しくて、家事も手伝ってくれる人だった  
が金銭面にルーズであちこちに借金を作られ、毎日のように信販会  
社からの催促の電話があった。

結婚後、信販会社6社に借金があるのがわかつたのだつた。  
私がどうにかやりくりして返済しても次々に新しい借金を増やす。

私の財布からいつの間にかキャッシュカードを抜き勝手に口座から  
お金を下ろしたり

生活費も抜き取られたりして、封筒に入れた生活費をタンスの引き出しの裏に隠しながら生活をしていた。

給料が手取りで25万。

そのうち返済分が13万だった。

私も家計の為、パートしていたけど、とてもじゃないが追い付かない。

好きだけど、優しいけどこれじゃ生活できない。

それに、大の酒好きで仕事帰りはもちろんの事、休日には朝から焼酎を呑んで

いるような人だった。

泥酔して帰り、玄関先で寝てしまう事もじょっちゅう。

体の為にもお酒を減らすよう説得したが言つ事を聞かない。

何ヶ月も悩んだ末、離婚を選んだ。

別れた後、私の身内にも借金をしていた事がわかった。

風の噂で今は奥さん、子供と幸せに暮らしているらしい。

私と別れた事が結果、良かつたのだからそれでいいと想う。借錢グセって直らないって聞くからそれはちょっと心配でもあった。

2回目の事情とは、察する通り「できちやつた」から。

1回目の彼を忘れる為に言ひ寄つて来た好きでもない男と付き合つてしまつた。

自業自得。

高校からの付き合いの歯に絆着せぬ物言いの友達には「妊娠するつ

て事は嫌いな男でもやる事、やつてんじやん」と言われ、又別の友達からは「そんな子、絶対愛せないから産まない方がいい」とも言われた。

そう思われても仕方ないけど、夫婦だからってHが必ずしも同意の上つて詰じやない。

些細な事ですぐ頭に血が上り、暴れたり「別れるなら殺す」と包丁を突きつけられたりつて事が何度もあり、部屋の壁は穴だらけ。

束縛も酷くて、スカートやブイネックやノースリーブの服は露出度が高いとかで全て捨てられたしりた。

妊娠が分かつて、産科の先生に「筋腫の小さいのがあるから、普通の人よりムリしないでね」と言われたが「妊娠は病気じやねーんだ」となにも手伝ってくれなかつた。

私は半分ヤケで、これで流産したらどれだけヤツは私にも周りにも責められるだろ・・・

と考えダブルの布団を干したりお風呂掃除もなんでもやってやつた。掃除機さえ気をつけよう言っていたのに。

完全にヤツにたいする当て付けだつた。

そんな男だから、Hだつて断ればどんな事になるか想像付くだろ・・・

結局それで産まれた子が今いるのだから、良かつたのかも知れないけれど。

この子はあんなヤツの子じやない。

私が一人でつくつて産んで育てたつてずーっと思いながら日々成長を見てきた。

妊娠する前からずっと別れたいと言い続け、その度に暴れ、暴言を吐かれ続け、

また翌日から好きでもない男の食事をつくる虚しさを抱えながら生  
活して来た私は

「子供なんていらねーよー訳わからんねえし」と言われ内心「やった  
！別れられる」と思つた。

ヤツにとつて結婚も子供もただのファッショニにしか過ぎず、一通  
り経験したらもう用無しなのである。

でもなかなか離婚届けに判を押さず、わざと「子供はやんねーぞ」  
と私が子供を抱っこしてこると取り上げたりする。

ファッショニとしか見ていないので、子供の面倒なんて見る訳が無  
い。

お風呂に入れたのも最初の数回。

さつさと寝入つてしまい、仕方なく私がバスタオル一枚で子供をお  
風呂から出し着替えを  
済ませ、お茶を与え寝かし付けてから起きないか気を配りながら改  
めてお風呂に入る。

子供の事を優先させると、「誰のおかげでメシが食える！俺の事を優  
先しろ」と

怒鳴り付けるくらいなのだから、子供を渡さないなんて気は毛頭な  
くただ単に私を困らせたいだけなのだ。

「子供なんて・・・」と言われた時、「じゃ、なんで産んでくれって  
言つたの」と聞くと

「自分の子供つてどんなか見てみたかった。」と言つた。

結婚も子供も未知の世界でちょっと興味があつただけ。だと。

そんなんあんな痛い思いをして産むこつちはたまたもんじゃな  
い。

そして、産んだ後は一切の世話しなきゃいけない。

でも、世話をし過ぎても「俺を優先させろ」と言われるのだ。  
どう？こんな男。

一緒に居たいなんて思える？

そんな人が居るなら会つてみたい。

私は一日も早く離婚届けが欲しかった。  
そつこつするうち、好きな女ができたようやつと「別れてやる。  
でも養育費なんて  
渡さねーよ」と。

これでやつと自由になれる。と本気で嬉しかった。  
一度と会わなくて済むなら養育費なんていらない。  
私の働いたお金でこの子を育てる。と決心した。

別れた後すぐに私の妹の友達に「誰か女、紹介して」とケータイ番号を渡したって聞いた。

全くどんだけしょうもない男なんだか・・・  
呆れてものが言えない。

こんなヤツでもとっくに再婚し、子供もいるらしい。  
こつこつ子供つくる資格ないヤツに限ってすぐできちゃうんだな。  
今の奥さんの事を物好きな・・・と思ったのは一瞬で“私と同じ思いをしてなければいいな”  
と思い直したのだった。

離婚した時、娘は一歳前。その娘がもう5年生。

「ね、ママ今年はサンタさんにw.i.p.頼むんだ」と、サンタなんて実在しないのを知つていながらわざと私にw.i.p.を買わせよつとするこじやくな真似をするまでに成長した。  
「サンタさんにきゅうりもひづー」と言ってた3歳の頃が懐かしい。  
w.i.p.はさすがに厳しい・・・困ったもんだ。

見かけは派手に見られ、バブルの時期にはアッキー、メッキーが居て当たり前と思われていた

私が、実はそんなモンは一人も居なく好きになつたら一直線なので離婚してからもお付き合いしたのはたつたの2人だつた。

やっぱり、子持ちの恋愛は子供目線でも相手を見るので難しい。

今時の保育園には、母子家庭の子が何人も居て、皆、子供が小学校に上がる頃を日処に入籍していた。

私も当時、3年程お付き合いしていた相手はいたがこの先、何十年と一緒に生活するには子供の事で不安要素があつて容易に入籍する気にはなれず、別れてしまつたのだった。

せっかく・・と言つては変だが一歳前に離婚して父親の顔なんて覚えてない娘にとつては初の“お別れ”になつてしまい、泣かれてしまつた。このときは本当に胸が痛かつた。

その後はしばらく何度も電話が来て復縁したいと言われたが、1回ダメになつたものはムリだと話し断つていた。

別れるのは氣力体力共に使うので疲れる。

私は、なんだか男の必要性を感じず、誰ともお付き合いしないまま4年が経つた。

流石に保育園の頃からのママ友も心配し、今度会わせたい人が居る。と言つてきたが私はすでに男なんて面倒だと感じる域に達しており、何度となく誘いを断つっていた。

何度もかの誘いで、「1回だけでいいから。相手は乗り気だしイヤなら断つていいから」と

言つので、一人じゃなければ・・と会つ事にした。

年齢は私の二つ上で同年代・バツイチの子ナシらしい。

当時、まだ30代だった私は40代の男になんて興味はなく、むしろ「おやぢじやん」と

思つていた。

30代後半の女がなにをおこがましいと思われるかも知れないが、昔からなぜか私は

年上に縁がなく、寄つて来るのは年下ばかり。

16歳の頃、初めて付き合つたのも一つしたの男子だった。

今思えば、中学生・・なんて事をしたのかと苦笑いしてしまひ。

結局このトシまで年上は一人しかいない。

友達にはよく年下キラーなんて金持ちのおばちやまのよくな扱いを受けたが、年上は

寄つてこないのだから仕方ない。

自分から寄つていく性格じゃないし・・・

池袋のバリ風居酒屋で待ち合わせをし、一足先に着いた私達は個室に入つてまだ見ぬ“那人”的事をコソコソと話していた。

10程経つた頃、“那人”は現れた。

証券マンでグレーのスーツを着ていた。

第一印象は「つまんなそうだな」だった。

全く好みではないし、なにしろこんな真面目そうな人とは付き合つた事がない。

その場は、当たり障りのない会話でお酒を飲みお開きとなつた。

翌日、お決まりだが“那人”からお誘いのメールがあり迷つたが

「もうトシもトシだし

好きなんてキモチより経済力よ！」と常日頃から同じシングルママの年上の友達に教育？

を受けていたので「若い頃みたいなキモチにはなれないし、そんなもんか」

「なにより、子供とのこの先の生活を考えなきゃ」と思いお付き合いしてみる事にしたのだつた。

でも、元々そういう計算づくな付き合いができる私にはムリがあり、なにより金持ちは自分勝手だ。と言う事を知ってしまった。金持ちなんかと付き合つた事ないし、逆に私が財布を持つていないと安心してデートできないような相手が多かつたから、本当の金持ちとはどんなお付き合いなのか知らなかつた。

もちろん、性格によつてだと思つから世間の金持しが全員、自分勝手な訳じやないと思う。

“那人”は所々でヤツを思い起させれるような人だつた。

「今までこんないいもん食わせてくれる男いなかつたんだろう？」

「俺と出会えてよかつたな」と常に上位に立つていていたい人だつた。それにヤケに恋愛に冷めていて、週末に会つようになつていたが翌日の仕事の事を考えて

20時には帰る人だつた。

高校生だつてそんな時間には帰らない。

毎回昼に新宿で待ち合わせ、ランチしてホテル直行。

夕方出て食事して20時には駅のホームにいる。この繰り返し。

思えば、初対面からそんな「俺様」ぶりがあつたと思つ。

仕事後の待ち合わせだつたし最初に「お疲れ様です」と声を掛けたのは私だつたが、その時も返事すら返さなかつたし。

半年付き合つて彼の車でお出かけしたのはたつた一回。それで私が満足していると思っているのがイタイ。

大人の恋愛なんてこんなモンなのか・・・と半ば諦めつまらない日々を送つていたが

結局、会つてる意味を見出せず半年で破局。

「こんなに良くしてやつたのに俺がなにをしたんだ」と最後までわかつていなかつた。

別れてから何度かメールして来てたけど、やっぱり「俺様」はイヤだし考え方にはなれなかつた。

男ナシの生活に戻つて3ヶ月。

4年も男を必要と思わなかつた私が、なんだか仕事と子育てのみの生活に物足りなさを感じていた。

やっぱり、女つて弱いんだ・・と感じた。

疲れた時に寄りかかる相手が居たら・・・  
たまには母より女を優先できる相手が居たら・・・  
と考えるようになつっていた。

### 「出会い系」

かなり抵抗はあつたが、暇つぶしにメールできる相手がいればいいな。とほんの興味本位で登録してみる。

するとすぐにメールの嵐で一日に30通を超えるメールが飛び込んで來た。

もちろん自動送信もあつたが、“年齢も子持ちだつて事も一切正直に書いたのに”と

感心する反面、その内容はほとんどが既婚者からの火遊びであり“

所詮、遊び相手としか思われないんだ”と落胆もした。

数日した頃、来るメールも相変わらず既婚者の火遊び目的と変態ばかりで登録した事を後悔していた。  
やめる前に1回位こつちからメールしてみよつか・・・  
と相手を検索してみた。

ふと、田に飛び込んで来たメッセージ。

それまでのヤケに“愛車はBMWです”とか“金銭面に不自由させません”なんて力ネにもの言わせるよつないやうじこものではなく、本当にシンプルなもの。

「なかなか将来に繋がる出会いがありません。よければメールください」って感じだった

と思う。

なんだか素直な印象を受けメールしてみることにした。

数時間後、返信が来てそれからは口に何度もメールのやりとりをするようになっていた。

お互いの写真も何度か交換し、だいたいの雰囲気もわかつたし、子供の運動会の日は

「楽しそうですね。ムービー送つて雰囲気を俺にも分けてくださいね」と子供の事も  
きちんと気にかけてくれる彼に好感を持った。

メール交換して一週間後たまたまその日は金曜日であり、子供が実家に泊まる日だった。

私と彼の住まいは車で1時間半程の距離があつたが、彼はこちらまで来てくれると言つ。

“どんな人・・・”“少なくとも性格は合つます”と何年ぶりにワクドキドキ。

メールが鳴った。

もどかしいキモチでチェックする。

すると「仕事が長引いて遅くなりそう」と書いた内容。  
がっかりしたが、仕方ないので「じゃあ、また次回にしましょう。  
逢つて話したかったけど」と返信する。

すぐに「待つて貰えるなら会いに行きますー俺もちゃんと逢つて  
話したい」

予定よりかなり遅くなり、予約していた店をキャンセルし皿洗いで待  
つ。

10時過ぎ「近くまで来た」とメールが来たので近所のコンビニま  
で向かつ。

しばらくどうしていいのか分からず読みたくもない雑誌を立ち読み  
なんかしていた。

「着きました！」とメールが来て緊張もMAX。  
そつと外に出ると、丁度店内に入ろうとする彼とバッタリ。  
すぐに分かった。

彼も「あ・・・」と小さく呟き一ヶコリと満面の笑みを浮かべてく  
れた。

その瞬間こそ私が「この人！」と感じた瞬間だつた。

写真なんかよりずっとずっとといい！

優しそうなその笑顔に一瞬にして恋に落ちてしまったのだった。

私は自分で言うのもなんだが、32歳位に見られる事が多い。  
彼は私より一つ年上だが、35～36歳位に見えた。  
笑顔が爽やかで、がつしりとしたガテン系。

この私が一目ぼれなんてありえない事なのに・・・

「雨、降つて来ちゃつたねえ」なぜか一言田に発したのがこの言葉。なにを言つていいのかわからず、だからって「はじめまして」なんていかにもそれっぽい

から言いたくなかったのだと思つ。

それから近くの居酒屋で2時間程過じ、彼は仕事柄朝が早いし帰るのにまた1時間以上かかる

ので店を出る事にした。

席を立とうとした時に彼は決心したように顔を上げ「……また、来てもいいですか？」

と言つてくれた。

嬉しくて嬉しくて「また来てください！」と返事した。すると、またあの笑顔で微笑んでくれた。

自宅前まで送つてくれ、車を降りると彼の車は走つて行った。見えなくなるまで見送りうつと立つていると、曲がり角で一旦止まり躊躇している。

バックして来たので走り寄り

「あ、帰り道教えてなかつたね。そこの角を左で国道の信号だから」と案内しました

「じゃあね。気をつけて」と見送つた。すると、また・・・バックして来る。

今度はなんだろ？

と思い近づくと「ちょっと一周しよう。乗つて」と車のドアを開けて來た。

ほんの数分。夜中だから車も居なくてすぐに自宅前に戻つて来てしまつた。

「またね・・・」と車を降り彼の車は今度は止まる事なく、曲がり角を左折して消えて行つた。

私は今にも飛び上がりたい程の気持ちを抑えながら部屋に戻る。

するとすぐに彼からメールが。

「いっぱいいっぱい逢いに来ます。逢う前からキモチはあつたけど実際に逢つて話してもつと好きになつたよ。帰るのが惜しい想いだつたな」

どう説明すればいいのかわからない程、その時の私は舞い上がつていた。

若い頃の、ただ純粹に人を好きになつたキモチ。

そんな感覚がまだ、私にも残つていたなんて・・・自分で自分がわからなかつた。

それからは週末を一緒に過ごし、何年も一人で過ごした誕生日も一緒にいる事ができた。

彼は指輪をプレゼントしてくれて、決して高価なものではないけど本当に嬉しかつた。

いつも「今の夢はちゃん(私)と(娘)と一緒に遊びに行く事なんだよ」と言つてくれる。

「今までの感覚となにか違つ。きっと幸せになれるつて思える」と彼も私と同じ気持ちで居てくれていた。

お互いにバツ同士。

お互いの痛みを知つてゐるから思いやれる。

バツ同士じやなきやわからない事もいっぱいある。

彼は真つ直ぐに「好きだよ、愛してる。逢いたい」とキモチをぶつけてくれ、夜中に逢いに来てくれたりもした。

もちろん娘が寝てるので、駐車場でほんの30分話すだけ。

それだけの為に翌日5時前に起きなきやいけないのに来てくれた。

そういうえば例の証券マンと同一年。

こんなにも違うなんて。と改めて感じた。

。

一ヶ月後、彼の田舎お父さんが具合が悪いとの事で急に実家に帰ると連絡が来た。

飛行機で一時間の距離がある。

普段、会えないんだといつぱい親孝行してきてね。と送り出した。  
寂しかったけど、心は繋がっていると確信があつたからガマンでき  
た。

2週間経つた頃、容態が回復に向かってるからと彼が帰つて來た。

その日は空港からまつすぐに私の元に來てくれた。

それから1ヶ月程、急な仕事で逢えなくなつた事が何度もあつたが、  
普段と変わらない生活だつただろうか。

あくる日また「田舎に行つてくる。」とメールが来て少々の不安を  
覚えた。

お父さんの容態が急変し、危篤状態で意識がない・・・と。

そんな状態で頻繁にメールする事もできないし、私はただ連絡を待  
つしかなかつた。

結局、一緒に年越しはできなかつた。

年明け、お父さんの意識が戻つた。との事で一旦彼は帰つて来る事  
になつたが

退院しても介護が必要になるからその手続きをしないとならないよ  
うですぐに  
とんぼ返りした。

彼の急な仕事で逢えない事も頻繁にあつたし、なんだか見えないな  
にかに妨げられているよつた気がした。

もしかして、一緒に居てはいけない運命なのかも・・・。  
それが1月半ばの事。

その何日後からメールをしても一向に返信が来ない。  
不安は募りつい「なんで返事くれないの?私の事イヤになつたなら  
そう言って!」

と今思えば思いやりのかけらもないメールを送っていた。

でも、その時の私はなにも考えられずただただ、不安だった。

離婚してから今まで女より母を優先し男の事で娘に悲しい顔なんて  
見せられない。と

常に一線引いた付き合いしかできなかつた私が、こんなにも素直に  
人を好きになれたのに

その人と連絡が途絶えてしまつた不安。

どうする事もできず、毎日暗闇を彷徨つてゐる気分で決して娘や親  
には悟られないよう  
するの精一杯だつた。

2月になつて新しくできたリサイクルショップに何気なく出かけた  
時、思いもかけず彼からのメールが来た!

お父さんが亡くなり気持ちが落ち込んでいた。と。

私はなんて自分勝手なメールを送り付けていたのだろうかと自己嫌  
悪に陥つた。

一人残されたお母さんの問題があるから、なるべく早く良い方法を見つけて帰るから。と。

また、私はいつになるか分からない彼との再会の日を待つ事となつ  
た。

いつも彼は「待たせてばかりで」めんね。帰つたら君の家の近くに住まいを見つけるよ」と言つてくれていた。

いつになるかもわからないが、いつの日か来るであろう日のためにショッピングついでになんとなく物件探しみたいな事もしていた。そんなある日メールの返信がない日があった。「ま、今まで一日位はこんな事あつたし明日になれば」とあまり気にしていなかつた。

彼の居るところは、想像以上に辺鄙らしく夜になれば辺りは真っ暗で車がないと生活できないようなところだと聞いていたし、毎日メールするにも話題に事欠くし。と。

でも翌日も返信がない。

ちょっと不安になり、お父さんに不幸があつた時も、何週間も連絡が途切れたしさかお母さんにまでなにか良くない事があつたのかも。とどんどんイヤな想像が膨らむ。もし、そうならしばらくはそつとしておいた方がいいしと思つてとりあえず連絡を待つ事に。

それからどれくらい時間が経つたのか覚えていない。待つてる時間はいつもの何倍にも感じるし実際はそんなには経つていなかつたのかも知れない。

それにしても、音沙汰がなさすぎる。彼の身になにか・・・と考えだしたらいてもたつてもいられず、思い切つてメールしてみた。すぐに返信。

「あれ？すぐに来た？なんでもなかつたのかな」と思いケータイを開ける。

“その他”のフォルダに“1”とメールの受信を知らせるマークが。なんだ・・・違つた。

とそのフォルダを開けてドキン！と胸が鳴つた。

エラー通知。

なんて書いてあるのか良くなからないあの、英文の長い、メールが届かなかつた事を知らせるものだつた。

「なに・・・」「届かないって？」「これってどういう事・・・」電源オフでもサーバーには届くはず。エラーって事は、そのメアドが存在しないと言う事か、拒否・・・それならばと電話を掛けたが、コールだけで繋がらない。そんな事を何度も繰り返した。

それからは頭の中にいろんな想いがめぐり、なにをしたのか良くならない。

気づけば一人車の中で呆然としていた。

翌日、会社に出勤し彼の事を相談していた友達に昨日の出来事を話す。

「えー？なにそれ？訳わからん！」

と私よりかなり年下の美人の彼女は首をかしげた。

その週の金曜日、その友達と呑みに行き私がどれだけその彼を特別に想つているか、その彼からの連絡が途絶え苦しい事を話し彼女は「もしかして着拒とかなら別のケータイから

ならかかるんじゃん？」と自分のケータイを貸してくれた。

でも、勇気が出なくて彼女に彼のケータイ番号を伝えかけてもらい

「ホールしたら渡してくれるよう頼んだ。

彼女がケータイを耳にあてる。

しばらくじっと待つていてる。

・・・と一瞬「えつ?」と言つ顔をした。

なにが起きているんだろうと彼女の顔を見つめると彼女はケータイを耳から話し一言

「“現在使われておりません”だって」とちょっと神妙な面持ちで言った。

まさか、そんな事になつてるなんて・・・

目の前が真っ暗になつた。

連絡付く方法なんてないし彼の周りの人の事も誰も知らない。

どうしよう・・・どうしたらいい?

友達に「自宅・・・行つてみるしかないかな?」

と言つと「そーだよ!もうそれしかないつしょ!」と。

離れて行こうとしている人の自宅になんて行つたら引かれるかも。嫌われるかもしない。

でも、もうそれしかできる事なんてない。

翌週の金曜、思い切つて行つてみる事にした。

友達もたまたまそっちの方面に用事があるとかで、一緒に行つてくれる事になつた。

雨が激しく降つている日だつた。

ほんの数回しか行つた事がないし、駅からの近道とかでかなりクネクネと曲がりながらだし、しかも夜だったしほとんど覚えていなかつた。

途切れ途切れの記憶を頼りに雨の中を歩いた。

手も足もびしょびしょになりながら、途中迷つてしまいだり着かないかもと諦めかけた

頃、見覚えある道に出た。

「あ！ここ の道わかる！」とそれからは真っ直ぐ行つて自販機を右に曲がれば彼の

住むアパートがあるはず。

そこには懐かしさえ感じるその建物はあった。

「ここだ・・・」

ホツとしたのもつかの間、表札は別の誰かのものに書き換えられていた。

ご丁寧に色まで塗り変えてある。

これで本当に絶望的。

でも、去るもの追わずの私がここまでしたんだ。もういい・・・。

帰りの電車の中、一人は終始うつむいたままだった。

彼女は用事がある途中の駅で下車し、私は一人泣きたいのをじりっていた。

それが4月の終わりの出来事。

彼に出会つて私は忘れていた純粹に人を好きになるキモチを取り戻した。

条件なんかじゃない。

好きならなんだつてできる。お金だつてたくさん持つてなくていい。車だつて軽でいい。

とにかく、付属品なんてなんだつていいんだ。

毎日、仕事と娘の世話を済ませベットに入ると彼を思い出してはため息。

泣けない程に悲しい。

でも理由なく消えるなんてありえない。

絶対になにがある。

絶対に帰つてくる。

お互い感じた事のないないかを感じたんだ。絶対に絶対にまた、逢える。

出逢つて半年が過ぎたけど、まだ両手にも満たない程しか一緒に居られなかつた。

まだ娘にだつて会わせてない。

まだまだ、一緒にやりたい事がたくさんあるー

絶対にまた逢えるー逢うんだ！

なにもできないけれど、そう想うのが精一杯だつたしなぜかわからないけど確信があつた。

一緒に居るはずだつた夏が来ても、彼を忘れる事はできず毎日、絶対・・・と考えるのがもづクセになつていた。

念じてるみたいでちよつと滑稽で怖いけど。

毎日ベッドで考える習慣はついたけど、メールの受信を知らせる音が鳴るとさつとした

時期は過ぎ、全ての生活が彼に出会い前に戻つていた。

会社友達との会話の中にも彼の名前が出る事はなくなつていた。  
友達も気を使つていたのだ。

私は、このまま逢えなくても一生忘れない恋愛をしたんだ。と  
清々しい気持ちさえ  
なつていた。

七月。

暑さも本格的になり、セミの声がつるさくなつて来た頃。その日は仕事が休みでたまたま従姉妹の家に行つていた。他愛ない話をしているとメールの受信音。

なにも考えず一連の流れで話しを続けながらケータイを開いた。

例の“その他”のフォルダに“1”確定ボタンを押しメールを開く。

一瞬なんの事か理解できない。

件名に“間違いがありましたらすみません”

「なんだこれ？」

間違いじゃん。と思いながらも本文を読んだ。

“1)のアドレスは　さんのものでしょうか”と私の苗字が書かれている。

一気に体が震え出し念のためアドレスを確認した。

そのアドレスの一部は彼の使つていた特徴のあるものだった。

思わず椅子から立ち上がり従姉妹に言葉にならない言葉でなにかを伝えた。

従姉妹は「早く返信してあげなよ!」と言つ。

信じられない気持ちで「今までなにをしてたのか」「どこにいるのか」「なぜ連絡が取れなくなつたのか」聞きたい事はいっぱいあつたけど、一言「待つてたよ」と返信するので精一杯だった。

「ちゃん、探したよー!」と泣いている絵文字付きのメールが来た。

「車上荒らしに合い、ケータイから財布から盗まれた。

なにもかもわからなくなり、今日、ちゃんと連絡が付くまで何ヶ月もかかった。」と。

私のメアドは単純なものではないので初めて会った日[アドレスの意味を私から聞いたのを思い出し、色々な組み合わせをメモに書き出して毎日メールを送っていた。

と言つ。

エラーで帰つて来るのがほとんどで、届いてもそんな不審なメールに返信は来なかつたらしい。

やつぱり彼とは繋がつていたんだ。

諦めなければ叶うんだ・・・と彼を信じて連絡も取れない状態で3ヶ月待つていた自分を

褒めてあげたい気分になつた。

その夜2時間電話で話し、他の人を探すのは簡単だと思うけど私はどうしてもそうする

事ができなかつた。ずっと信じてた。待つしか方法がなかつた。と今までの思いを伝えた。

彼は車上荒らしでケータイもお金も盗まれ結局、帰つてこれず田舎で仕事をしていると言う。

賃金が都内の半分以下でなかなか貯まらず帰れない・・・と。

又、不確かなアドレスに何度もメールしては届かない状態を何ヶ月

も繰り返し、ここまで諦め切れないのはきっとなにがある。と思つたとも言つていた。

切るとすぐに「俺の愛した人に間違いはなかつたよ」とハートがいっぺい付いたメールをくれた。

もちろん、友達にもすぐに報告した。

「はーあ？ なにそれ？ 意味わからんない」とすぐにメールが帰つて来て、会社で会つた時には

「ありえないっしょ！ 絶対もう連絡ないと思つてたし。」と本音を漏らしていた。

そりや、そうだよね・・・。

それから約1ヶ月。

また毎日、朝には「おはよう」「昼休みに」「午後も頑張つて」「帰宅し「お疲れ様」と

メールをやりとりする日々となつた。

8月末、彼が「そつちに帰るよ」とメールをして来て私達はおよそ8ヶ月振りの再会を

果たす事となつた。

「きっと逢つたら泣いてしまう」そう思つていたけど涙は出なかつた。

一緒に居る事がそれほど普通の事になつていたのかも知れない。

また今年も私の誕生日と一緒に過ごす事ができたけれど、去年は離れていたクリスマス、

今年は子供と3人で遊びに行けるかも。

一旦は切れたと思っていた運命の糸。

こんなに離れても、連絡取れなくなつても繋がつていたのはきっと

奇  
跡。

だからもう一生切れる事はない信じて。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2764d/>

---

kiseki

2010年11月25日13時46分発行